

湯の丸高原ビジターセンター（自然解説文①自然）

湯の丸高原（ゆのまるこうげん）は標高に応じて、亜高山帯の針葉樹林部と、高層湿原および急斜面部の2つの生態系に大きく分けることができる。

高原一帯は大部分が木に覆われており、特に北側の斜面は、積雪によって木々が冬の風と凍えるような寒さから守られている。森の大半はコメツガ、シラビソ、ゴヨウマツ、カラマツなどの針葉樹からなるが、ダケカンバ、シラカバなどの広葉樹も生えている。第2次世界大戦後の再植林の取り組みによって、国内の多くの地域にカラマツが植えられたが、湯の丸高原はそれ以前からカラマツが自生していた場所の1つである。

通常は亜高山帯とみなされるこの高原に高山帯の生態系が存在できるのは、いくつかの風土的な条件に理由がある。ひとつは、日本海（にほんかい）から吹く北からの気流と高原の斜面の南から吹く暖かい気流がぶつかることで生み出される強い風である。次は、高原内の高い場所の土壌が、ガレ場で、比較的乾燥している点である。さらに、日中と夜間の気温差がかなり大きいことも挙げられる。これらはすべて、高山植物がうまく順応している条件である。約1万年前に最後の氷河期が終わって気温が上昇し始めたとき、他の場所では絶滅してしまった植物種を、湯の丸高原の比較的厳しい気候では維持することができたと考えられている。長い年月を生き抜いてきた植物が、外界から隔離された湿原と、背の高い吹きさらしの斜面で今も生き続けている。

なお、気候変動の観点から、この高原の高山生態系を保護することが目下の懸案事項となっている。年々気温が上昇するにつれて、亜高山帯の樹木がより標高の高い場所でも生きられるようになり、高山帯を侵食し始めているためである。池の平湿原（いけのたいらしづげん）では乾燥化が徐々に進んでおり、湿原と、湯ノ丸山の東側にあるレンゲツツジ群落ともに、笹によって周囲を侵食されつつある。この流れを食い止めようと、毎年、地元自治体主導の取り組みで、侵食している植物の除去、該当区域への立ち入り規制、環境意識の啓発が行われている。